

特253  
153

今井登志吉教授講義

# 史學概論

昭和十二年夏東大講義

（第一分冊）

東京大学出版会



# 始





特253

153

今井登志喜教授講述

# 史學概論

昭和十二年度東大講義

〔册分一第〕

版會行刊トシリブ京東



特253  
153



今井教授 史學概論 目次

§ 歴史の發生的考察  
§ 歴史は繰返すと云ふ意義  
歴史の  
実用的意義

四二五  
一八





### 史學概論

歴史の研究法と云ふ名の書物は古くみら出て居る、ギリシヤ時代にもあつた。併し乍ら古く研究法と云つたのは敘述の方法に関する書物即ち表現法の書物であつた、文藝復興以後は漸く歴史學が新しく進歩して漸く論法方法論に関する敘述が表はれて来た、然し今日云ふ様な研究法の組立は十九世紀の半ば以後に出たのであつた。そう云ふ研究法の書物が出たのは其根底は十九世紀に於ける歴史學の進歩がある即ち、多くすぐれた歴史家出て、それぞれ歴史を科學的に研究した、この科學的とは他の一般科學を本質上同じ方法を用ゐて研究するのを意味する、つまり多くの研究者の實際用ゐた研究法が整理され秩序づけられたものである、其處で其書物の中で著しいものは、

(1)

*Guetau Draparn: Grundriss der Historik 1867.*  
この書物は小冊子だが然し其後この種の書物が組立てられる基礎を提



供してゐる意味で極めて注意す可きものがある。

(2)

4. Freeman: *The methods of Historical Study* 1886

Baukenin: *Handbuch der Historischen Methode* 1899.

研究法の書物としては epoch-making の書である。Bryce の著

述された論断を擴張し、細詳し、其後出来る書物は殆ど之に仿つて定ま

られたと云ふ事も出来る。これは新版に於ては更に増補して史学概論

(歴史書)の書物と云つて居る。

猶彼は之を要約して Göschen の小集の中の "Einführung in die

Geschichtswissenschaft" 1905 として居る。

所がこの彼の書について併圖で "Langlois et Seignacelles Introduction

aux études historiques" が出た居る。これは Baukenin の書と比して

實際的であり平易であるのが長所とされてゐる。英文も出て居る。

それから更に戦後のもつては Fader: *Lehrbuch der Historischen*

*Methode* 1921 がある。このある部分は要領よく且つ速くよゝ、Baukenin

の不適當と思はれる所を云ひ方を変へて居る。

Bauer: *Einführung in das Studium der Geschichte* (1921)

此の書物は Baukenin の不適當と思はれる所を変へ新部分を取入れて

居る。更に部分的に見て一時代の研究書には

Walf: *Einführung in das Studium der neuern Geschichte*

1910. (近世史の研究)

がある。が上の書物でも各部分にあてはまるから、之は餘り必要とな

ない。

更に日本文の書物では、  
坪井右馬造、*史学研究法* (三版)

(3)  
この初版は一九〇三年の内容を見ると大体の撰び方を見ると Baukenin  
に似てゐるか、甚だ消化されて居る直訳的書物でなく研究書としては世界  
的の書物である。(坪井博士は Baukenin の初版を読んでこれに仍り書  
いたと思ふ)



黒田博士。國史の研究。

日本歴史研究では甚だ適切な書物なり、最初は一冊から二冊になり、  
今では三冊である。

大類伸。史學概論

野々村三博士。史學概論

等がある、要するに坪井博士のが最もすぐれて居ると思ふ。

以下歴史學の問題を取りて夫れに依りて述べんとする。

§ 歴史の發生的考察

史と云ふ字の意味は過去の事の記録せられたものと云ふ事であり、又  
それから轉じて其種の記録を採ふ人間を指すのである。この字に當る歐  
洲の言は *History* (*Historie*) *Geschichte* である。この中前のは *Latin*  
語の *Historia* から出る。此れは同形のギリジヤ語より出てゐる、之は  
過去の出来事、其記録、更に一般に廣く一般に語を意味する言葉である。  
此の *Geschichte* は *Geschehen* から出る。出来事を本来意味する訳だが、  
天張り過去の事柄、更に *History* (1) と同じく話、物語を意味する事あり。  
(註) 小説も亦 *History* と云はれる、此れは話の意味である。

然らば歴史、即ち過去の事柄、之を得へる言葉は初め漠然と一般に過  
去の事、若しくは人間社会の出来事の形を持つて居る、即ち歴史的事実  
の形を持つてゐる事柄、話、物語を廣く色々の言葉を包んで居る事が認め  
られる訳である。此等の言葉が出来事と同時に其記録を意味する、之れ  
過去の出来事を研究すると云ふ學問即ち歴史學と云ふものが発達して来



るに及び従来の漠然とした呼び方を區別する為、新しい呼び方が出る、  
 一つは *History* から出る *Historik* 或は *Geschichte* から *Geschichte*-  
*wissenschaft* が出る両者共に歴史學或は歴史科學の意味である。  
 この様に於て歴史を意味する言葉が色々あるが、之を連關して歴史と  
 云ふものに対する人間社會の意識、これが變化して來るのである、即ち、  
 この更に於て歴史の發生的考察に云ふものを行つて見る所の意義を認め  
 る事が出来る。

次に歴史の意識は如何にして起るか、これを考へて見る、この問題に  
 對して歴史は過去の出来事なりと考へる、こゝで見ると歴史は客觀的存在  
 となる、人間の意識すると、しなやかに拘はらず、人間の過去は存在する、  
 其意味の過去の出来事、人間の意識に無關係に存在する事、この全部は  
 到底つかぬものがある、又これは後の復活出来ぬものでもある、  
 我々が過去と云ふ事は我々の意識する過去の物である、其過去に對  
 して意識を持つ事が即ち、人間其物が歴史を持つ事になる、歴史は人間

の意識に拘はらず存在する、一般に歴史のあるのは意識する歴史がある  
 からである、この意識は色々な要求から出て來た事が發生的に考へられ  
 る。

其れを先んずるよりすると、先づ第一に「人間社會特有の物語に對す  
 る要求」が考へられる、其物語に對する要求とはつまり、人間の社會的  
 事實に向つて起る所の一種の藝術的要求である、これは人間の社會生活  
 が相當長い年月を経た為、此の要求換言すれば眞理が出て人類に本能  
 的になつたものと認められる、この要求の本能的である事は子供の心理  
 の発達を考へると相利るのである、この智能が進むと幾つかの知識的要  
 求が出て來る、其一つは事物の合理的説明を求めると云ふ事、何故に  
 風が吹くか、雨が降るか、と云ふ問題は上の要求から出るものと考へら  
 れる。

これこそ人類社會の科學を發達させた心理的基礎と見てよい、然し其  
 合理的要求と別に子供の心理の中に語を求めらる要求が出て來る、年長の



人から面白い話を聞く、この時、この要求に應ずる為諸民族に童話が主  
 ずる。これは人間の本能的に持つ所の面白い事、珍しい事、好き心を満足  
 させると云ふ事を求める心、子供の素朴の現はれと見られる。人類社会  
 が或程度進むと、こゝに云ふ種類の藝術的要素から進む物語、神話、傳説  
 と云ふ形に於て敘事詩の形で成立する。因より神話の如きは單にこの要  
 求に基づくだけでなく、それと同時に世界の事物に対して合理的に説明  
 すると云ふ要求に基づく所のものを多く混じて居る。然し其の中に前述  
 の人類の社会が面白い話を求める本能を持つと云ふそれから出てゐるの  
 も決して少なくない、こゝに云ふ話の要素(心)を次第に分けて、一つは  
 純粹藝術に他は歴史話と云ふものに進んで行く、つまり藝術の一つの様  
 式として話を取扱ふものがある小説、戯曲、即ち話の筋ある藝術、これ  
 が最初に漠然とした要求から出て来たものである。(1)

(註) 詩、小説、劇、等は話の面白さ、或は筋其の物だけでもなく、  
 又は所謂大衆小説と云ふものでもなく、筋から離れる事もなく、

筋其物が骨子となつて出来てゐるのである。

優れた藝術でも *popularity* を持つものは筋の面白さを持つ、大衆性な  
 くては *popularity* を持たない *Shakespeare's drama, Hugo の小説等*  
 皆夫々筋の面白さがある。又一面批評家に長く評價される *popularity*  
 のないものがある、これは一般大衆に理解出来る筋の面白さが無い為で  
 ある、従つて筋を持つ藝術と云ふものが判る訳である。

こゝに云ふ藝術にまで変化し進んで来たが、夫れが人間空想の所産と分  
 化して之として兎に角人類社会に起つた事柄に興味を持つ、これが歴史の  
 意義の原始的形体と思はれる。夫はつまり事実起つた事柄の中で面白い  
 事、興味ある事を取り味ふと云ふ立場である。歴史の敘述様式の発達第  
 一步として上げられるものは説話的歴史 *Repetitive Erzählende* である。  
 これは即ち、歴史の中に歴史かして面白い話を求めると云ふ性  
 質を現はして居る。本来が興味本位である、従つて興味ない事はこの中  
 に取り入れず、又興味本位に事実が曲げられると云ふ弊に甚だ落入り易



我が國の古い歴史書の中に物語と云ふ種類のものがある。これは純粋歴史でなく、文學的なもの、これを歴史書として見れば、話を要求する立場から本来の歴史が甚だためられてゐると云ふ事が判る。こう云ふ物語を歴史の中に要求すると云ふ事は人類の本能の要求を求める筈がある。だから歴史の記述は現代迄多くの場合何からして非意識的に伴ふ事も免れぬ。つまり面白い話を傳へると云ふ考へが敘述の中に入つて来る。これは現代に於てすら多くの歴史的著作の中で認められる事である。(2)

(註) 今の社会でも人間が話を求める事云ふ要求がないではない、例へば新聞を見る、この中にこれと誰でもないものが存在してゐる。即ち連環小説である。これは何せか？ これは新聞が読者の興味に訴へると云ふ事である。大衆一般に理解され易い即ち低級なものを書く必要がある。又は講談の如きもそれである。readingなるものを考へると、この社会の心理に伴つてゐる事が判る。これは全体的に見ては実用的であると云ふのではなく、寧ろ興味と云ふ事、

導語として面白いと云ふ事がある。だから大きな事でも時々省かなくてはゐる事がある。だから將來之を史料とする時は、この貞をよく考へる可きである。少くとも其時代に *revolution* を起したと云ふ事は又歴史上の大事件とさせて居ると云ふ事が判る。

歴史は興味本位の *episode* の年代的羅列と云ふ事が出来る。過去の先例からして教訓を得んとする要求。これは場合に依ると興味を求めると云ふものより更に古く、根本的かも知れぬ。

普通に此の立場から出る歴史を實用的歴史、*Pragmatische* と云ふ。之は物語的歴史よりも更に発達して来るものと云へる。歴史記述の様式としては或は其の順序附けが正しいかとも思はれる。併し乍ら歴史と云ふ意識を起す基礎の心理からすると先例を求めると云ふ要求は最も原始的と考へられる。我々が何ぞ記憶を持つか？ これが又如何にして発達するか。これは人が過去の経験を記憶する事に依つて未來の行動を決定する参考にしようとする立場から出る。つまり過去の行爲をより行動の参考



を得ると云ふ事になる。

註) 物語がなければ我々の生活は成立たない。  
人類生活の特色は智能の進んだ生活をするに云ふ事、人間の記憶は第一に自己の経験の記憶である、社会生活が進むとやがて自分以外のものの経験、即ち他人の経験をも後立させんと云ふ方にも進んで来るのである、或は又それを逆に云へば自分の経験を後へ傳へて後立たせんと云ふ事にも進んで行く、人類社会の特色はそう云ふ意味の心理的交渉が各人之間にあると云ふ事にある、つまり外の動物では物を本能に依つて決定して行く、人間は教育に依つて物事を決定する、教育は前の人の経験を後へ傳へる事である、此の立場からして多くの人の経験を過去に傳へて後立たせる、其心理から歴史の知識が発展すべきである、多くの古民族の如きは年代記を造る、其處にある記載事項は雜然と、時には全く興味本位のものがあるが又原始的實用主義も認められる、これを記す事が後の役に立つと云ふ為に記載される、この事は看過出来ない事である。

歴史の知識が実用的に役立つか否か、究に角歴史の中に実用的の事があることを記憶す可きである、この事は物語等より更に古いかも知れぬ、話の元來根本をなすものは實用主義の記憶の方が大きいかも知れぬ、即ち鑑、カガミ(カン)と云ふ体である、これ即ち教訓的歴史 *Lehrbücher* ぐ軍に興味本位でなく実用的と云ふ事が含まれる可きである。

註) *pragmatische Geschicht* カガミ、鑑、等。

更に進んで「歴史が振り返す」と云ふ意味にまで進んで来る。  
此の振り返しは實用主義と如何に關係があるか、これは現在社会にも起る事柄ではある、従つて過去の先例を受けける教訓史については實用主義は關係のない事になる。

*Pragmatische Geschicht* (カガミ、鑑、等)

史學的に見て説話的歴史 *Erzählende* が先づ第一に発達した、夫れに

ついでに教訓的歴史 *Pragmatische Geschichte* の体が現はれる、此の *Pragmatische* とは「カリシヤ」の *Pragmata* と云ふ語より出て居る、此



の字の意味は國家に関する事、*polis* に関する事を含んで居る。歴史を以て *pragmata* を記すものを誰が云つたかと言ふと *polybius* である。而して *polybius* の祖つた所と同じ立場に於ける歴史を書いたのは古代の史學の中で最も偉大なる足跡を残した *Thucydides* である。この人も *polis* と共に當時一般に知られたる *Empirische geschichte* を排した。 *Thucydides* の方は *Herodotus* *Blennica* 市民の歴史家達が説物としての歴史を目的に対して真偽不明の事柄として物語つて居るのを未だし、*Herodotus* の書物の中には *Homelas* の書と同様に神話的なる要素を含んでると見做して歴史の に享譽を共へ若しくは大衆的政功を得る事を目的とするものではなく真理でありそれが爲に永遠に價値のある記録を作ると云ふ事を目的とした。

*Polybius* の方も亦其當時読まれた所の *Physiologie* の文學的歴史を非難して歴史をば悲劇として別個の目的を有するものである。悲劇は人間の魂を動かす事を目的とするものがあるけれども歴史は人の理智を

救へるものであるとして居る。要するに當時の歴史書は多く文學的のものであり、諸者の同情又は譁々を起す事を目的として居る。例へば悲しみの極みに陥入つて居る人間、發振して立つて居る女、抱き合ひ泣きわめいて居る小供や老人かゝる者の實際の狀態に適合して書かれる文學的效果を奏する事を目的として祖つて居る。之は勿論 *Empirische geschichte* を目的とする所にある。そして両者共に歴史事實の同等關係を明にして過去の事實からして實用的教訓を保たんとする態度を取つて居る。此の古代に取つた実用的歴史の事件に *pragmata* と云ふ言葉の意味する如く政治が主眼となつて居る。又其中より教訓を保たんとする矢に於て倫理的である。故に夫は東洋に於て歴史を體としてゐるのと同じ立場に立つ。(休通假) 従つてこの歴史の記述は當時の政治史本位となる。更にそれが教訓的である爲に殊に人の心に重きを置く。この史流の末流に於ると倫理的教訓の便利の爲に事實を歪曲して記す様になり、神聖より遠ざかつて行く事になる。



以上は人間の社會に歴史を意識する事の要求を擧げたものであるが、之と共に尚ほ歴史の記述が生れて来る他の場合がある。これは人間が歴史を信ずると云ふ要求心理である。勿論之は前者より遅れて来るものであるが、この歴史に於ては人間の慾求には一つには人が永遠の生命を欲する所に關係ありと思はれる。長く生きたいと云ふ事は動物の本能である。而して之が社會生活をしてゐる人間になると内体の死に保たんとしても尚ほ自己の生命を根據として世に残さんとする本能が生じて来る。

古代の帝王、又は外の権力者が自國に於て自己の功業を万世に傳へる爲に Monument (記念碑) を作つて居る。この Monument を作る心理が歴史を作る心理に關係を付けて考へる事が出来る。

例へば古代史研究に於て非常に有力な権力の名となつて *Bekistan* にもよく現はれて居ります。この碑の文句が之を表はして居る。之等の彫刻碑文を見ると破壊しない様に保護するならば *Civamajala* の神、人

を保護した。其人々が榮えるであらう。又長い生命を保つてあらう。願ひ事は彼が叶へるであらう。と書いてある。つまりこの碑文に功業を刻してこれを破壊しない事を望んで居る。

更にもつと之を明白に云ひ表はしたものは *Cashur - Nasir - Part III* (883-858 B.C.) での *inspiration* に「之を破壊するものは神の呪ひを受け、……と」長々と記してある。要するに、この碑文に擧さぬいで肖像を變化し油をぬり、土に埋め、火の中に、水の中に入れて或は之を動物、家畜の住む所に置いて人の見る事を妨げて、この記念の石に害を共へるならば又自分がないても敵に、犯罪人に、又は其他の人にさせたり、それを削つて外國語に変へさせたり、其類の事をしたならば、其の人の支配する間に人々が殺逆して、彼を殺し、其の人の像をこはしてしまふだらう。つまり其事をする人は *Cashur* の神の呪ひの爲だらうと考へた。

之は要するに帝王が自分の名を永々に傳へんとする所から、この碑文



を后世に残さんとする感情が露骨に記されて居る。又之は此の時代の習慣である。

併し乍ら更に尙ほこの人の心理の中に自己の名と永久に傳へんとする言語に一面功利的立場も入ると考へらる。それは支配者、自家の政治的・社会的地位を確立する爲に自己の征服事業又ハ功業を列挙して、それを誇示し、それによつて 権が功利的目的を達せんとするのである。

エジプト、ナイル河の上の *Karnak* と *Amon* の神の城あり。この神がヤシロ (大さな殿堂) を建てた當時のエジプト王の *Thotmes III* (1551-1461 B.C.) が或日シリヤの方面で他の國の城を攻撃して十七回討り戦つて勝を得たるが、この當時の繪は實に史料の價値があつて當時の戦術を見るのに有益なものである。かくの如き彫刻をすることは王が自己の功業を人民に示し、彼の人民をして、その王家を尊敬させる爲である事は勿論である、即ちこゝに宣傳的目的が *Memorial* の種類のものをして制

約する事になる。諸國の多くの碑文の中にこゝに云つた性質がみくされて居るのは色々の異ぐ認めらる。即ち、歴史を傳へる心持の中に先づ自分の名を後世に傳へんとする目的の外に、それを残す人の功利的心理が基礎になつて居る所がある。之は古い時代の石や碑文には限りず更に後世になつて各時代に纂纂される歴史書の記述の中に傳はつて居ります。支配者の護用的立場の中に碑名的要素が入るのは自然である。支那の王朝の歴史の如きは新王朝、或は前王朝を書く際には前代の政治が今の代に惹へて臣民の人望を失ひ、自己の國を治めるにいつての才力の不足を記して間接に自己の歴史的存在理由を説明する立場があると思ふ、尚ほこゝに云ふ風に色々の種類の心理的要求が人間社会に歴史記述の要求を起させる事を認めるが、之を同時に人間社会に、この文化が達んで来る純粹に智識的要求としての歴史の智識が起つたと考へる可きである。それは種々の自然現象に対して合理的説明を求めると同じ様に社会が如何に變つて来たかの智識が古い所から芽して居るのと同様で、神話と云



小ものでも既に或程度まで之に應ずる性質あり、即ち 六は非常に主観的だが、天地創製から、其の時代に至るまでの変化を或程度に説明してゐるのである。唯だ古い時代では此の要求が純粹に動かず又右程明白に動かない。色々外の立場に立つ心理が其の云は、學問的要素に制約され、てしまふ。それは時としては今日すら尚ほ見られる現象なり。  
 然し尤角一般科學に於けるが如き心理を求めるとは人間社會の過去に働か、この考の強くなるにつれて次第に學問的になる。先の *Stacydidus* は真理なるが故に永久に勝つと云ふ事を狙つて居る、即ちよしそれか *Magnatism* と稱するべからざるものでも尤角其の歴史的事実を求めると勢なる態度がある。従つて彼の書いた歴史書物が、即ち近代的意味の史學が近世の多くの史家に大影響を與へて居る。十九世紀以後は一般に科學的精神が進歩し従つて當然歴史研究の上にも働いて来た。そして歴史を一種の科學、即ち、文學に發展させた。十九世紀の史學が説話的歴史或は實用主義的歴史を排斥する立場にある、其の様な形式が真理をため

る事よりあると認識したからである。一得智識は対象の雜然としたものを集める事、又不秩序の集合から始まる。漸く一般的要素に基づく組織的、系統的秩序は進み、又外的特徴の認識から始まり内的感覺の把握に進み、其處に科學性が存在する、従つて歴史は先ず個々の事實を誤らず認める、そしてそれを出来るだけ細かく探求する、更に其上に断片的事實、組織的史実を加へる。そして科學的史學が成立する訳だが、この形が成立したのは極めて新しい事と云へる。人類が歴史を持つてゐると云ふ歴史は永いがその認識の仕方も概して永い、又は訓話的である、或は又功利的だと云はざるを得ない。

〆 歴史は線と云ふ意義  
 歴史の智識に實用的意義を認める事、即ち云はば歴史の *pragmatism* と關係があるが歴史は線と云ふ考である。古くから過去の事柄を尋ね



て、其先例に依て我々の生活の参考にもしようと云ふ考のあつた事は前述の如し、其の考の根底には歴史は繰返すと云ふ見解あり、この思想は極く古くからあつたものと考へられる、一例を挙げると Bible *old Testament* の傳導書の第一章に「先にありし者は又後にあるべし、先にありし事は又後になるべし、日の下には新しき者あらざるなり、見よ、これは新しき者なりと指して云ふ可きものありや、それは我等の前にありし世より既に久しくありたるものなり」とあり（先にありし事）先になされた事は *done* と用ひてある、過去になされた事は将来をなされるやうにと云ふ事である、之は明らかた人間社会の歴史が繰返すとの意ありである、歴史家の著作の中に此の書の認められるのも極く古く、先述の實用主義の歴史家として数へる事も出来る、*Thucydides* 云々から後の推移を知る為めには過去の変遷を知る必要あり、過去にあつた事は又将来に起るならん、然してこの歴史は繰返すと云ふ事を実用的具体的に述べ

てゐるのは *polybios* である、後には所謂歴史の *Encyclopaedia* の説をその著書の中に主張してゐる事な認められる一体之は、ギリシヤ時代に多くの都市國家あり其處に政治形式が現はれてゐたので *Plato* 等の哲學者が政治形式の推移、循環の説を立てる。

(註) 例へば貴族政治とか、民主政治とか云ふものである、  
*polybios* は之れを現実歴史に適用して一團の政治は次の六個の政治を経過して、又これを繰返し、それを終れば本にかへる、この六個の政治とは

- (1) *Monarchy* (独裁政治)
  - (2) *Tyranny* (君主政治)
  - (3) *Aristocracy* (貴族政治)
  - (4) *Oligarchy* (寡頭政治)
  - (5) *Democracy* (民主政治)
  - (6) *Choirarchy* (暴力政治)
- (3) の政治、ギリシヤ時代は共和政治)



(2) Tyrannus から出たもので、今云ふ意味と違つて居つた。専主と  
訳してゐる。即ち Tyrannus の政治。

(3) 多数者が議會で衆議のあるもの。

(4) Cheirocracy は一種の *mirarchy* である、腕づくの政治である  
ローマの方では貴族、民主政治になる、これを他の國でも一つの  
行き方とまで考へた。Polytheism の時は *democracy* が行詰り、  
これより *Cheiro* が起つたものと見る。

従つて の考へは世界に進歩なく循環であると考へたものと  
判る。之は歴史が繰返すと云ふ行動程である。こう云ふ繰返し思想は古  
代相嘗行はれて居た之は世の中に進歩が意識されない時代は當然の考で  
ある。(1)

(註) (1) 支那人は元来自分で發明法と云ふ考が嫌で誰かう教へられたと  
考へる。ギリシヤは既に發明の思想あり、先生から新説を聞くこと  
これを訂正、又対までして自分で新しく前述の進歩の思想が生れ

たのは今日だが昔は繰返すの思想が盛んだつた。

中世キリストが學界思想を支配して人間社會の推移は一つの *plan*

ありと

に基づく神の意志とし、歴史の進めにも神に依る一つの  
見た、従つて循環と云ふ考が出て来たのである。即ち、神學的からも廻  
轉の思想が現はれる訳である。

近世になると又古代思想復活し、そして人間社會の推移が神の法則に  
基づくのではなく、古代人の考の自然法則に基づくと云ふ考がある程度ま  
で復活した、そこで歴史は繰返すと云ふ事が再び勢を得る。

近代文學の大立石なる *Machiavelli, Guiccardini, Bodin* 以下多く  
の人の著作の中に繰返しを認められる。歴史は繰返すの語が一般にまで  
使用されて来る。

最近歴史學の進歩につれて歴史の繰返しは否定される。この根拠は次  
の二つの立場にある。

第一は、歴史と云ふものの形式的論理的性質から見た考である。之は



歴史の認識の特色を個性的に考へる考へ方で、即ち西南ドイツ學派の重  
要視された事である。

歴史家の方では、例へば *Edmund Meyer* が其名著たる古代史の初版  
（一八八四年）の巻頭に *sinthnology* へ歴史の説に色々論及して居る  
即ち、歴史學につれて必要なる程度まで *Anthropology* に接する可きたと  
考へて居る。問題はどうか、事に歴史を記述するか、歴史の祖は何  
處かである。

比處で多く同様の見解を述べ、歴史は假令一般的法則に仕へて之に  
還元し若しくは單一形に解体されるものではない、歴史は必然的に多種  
多様である、如何なる部分も同様でない。(1)

(註) 歴史は、歴史科學と自然科學とが違ふ相々の部門を何處までも  
現はして行くのである、各部門の特色まで細部に渡つて書いて行  
く、繰返す所は取らない、そうでない所だけ取る、

所が彼はこの書の新版でこの考を普遍して、この決して繰返さずには常

に変わった姿に現はれる單一の部分か歴史科學の領域である、之は *Richard*  
の自然科學概論構成の限界の出た後で、この影響を受けて居る既に一八  
八四年の書物に彼の本来の見方を書いてる中に歴史は繰返さずの事が含  
まれてる、これは形式的論理的に言葉通りに云つた云ひ方である。

第二の方は歴史の内容的実質的性質から見た考へである、之は第一の  
概に極端に論理的性質を基礎として云ふのでなく實際的根拠に立つ歴史  
の繰返しは歴史現象の循環である、所が人間の歴史現象は循環でなく帝  
に進歩発達である、この人間社会の歴史的發展は文明の進歩の顯著な近  
代で認められる、古代の *Polykris* の歴史循環は認めないのである、新  
しい形体が常に古い形体に変わつて廻轉する、太陽の下に新らしきものな  
し、太陽の下に永えなるものなし、不断の変化が変る、そして例へば

*Bulgakov* の「資本形体と都市形態」の中に各時代歴史發展の新華美  
とカヒを持来す、歴史の創造力は枯渇しない、この立場から歴史の廻轉  
を否定する例として *Bunoy* を挙る、此の人於



"The ancient greek history" 1909.

の書物の中で循環の理論は捨つられ、無限の思想が代る。我々は歴史は繰返さず、異つた時代の歴史現象の類、其兩者の間よりも皮相的である事を明確にした。即ち似てゐる点ありとしても一つの時代は單に其事が起るのではなく色々な事が起る。だから異つてゐる点が重要だと云ふのである。類似してゐると云ふ事があるれば繰返しを認める。

以上が歴史の繰返しを否定するニ根據である。之を吟味すると歴史は繰返すと云ふ事を同一と云ふ事に解してない、第一は繰返しを厳密に歴史認識の形式から其の個性と主張する、歴史には同一事は起らない、第二はそれ程嚴密論理的でない歴史は循環でなく新時代への進歩である。類似した事も実は違つて居る、第一の根據については此の繰返さないと云ふ事は首肯出来る、固より繰返すとは第一の意ではない、第二の方に於いて吟味を要するは、古く多くの歴史家の懐いた歴史循環は歴史現象の完全循環でない、これは Polybios の吟味でも判る事である。彼は前

述の如く実用、教訓主義の唱導者である。其著作は巻頭で實際政治生活で最も健全な教育、訓練は歴史の學習だとのべて居る。そして歴史の実用的教訓的價値を説明してゐる。

其處で今循環論を兩立と考へて注意す可き点あり、若し歴史の循環が完全繰返しを意味するなら人の努力に拘はらずその通りに繰返す可きである、即ち歴史の繰返しは完全決定論なり、過去の経論を熟知しても、之が繰返すと云ふ事は不可能であり、従つて過去の歴史の実用的價値はたい事になる、又繰返しを充分な意味で云へは教訓的と云ふのと逆である、彼の云ふのは政治形式の循環即ち抽象的事柄の循環で事實の循環でない、即ち Polybios の云ふ歴史循環は彼の場合には政治形式だが他の人の書物では類似した事の起ると云ふ意に取つてある。

Polybios の循環論に頗る公式的のものが有るが多くの歴史事件には必ずしも Polybios の如く公式を立てたり、唯人間の社会現象に對して自然現象の Analogy を行ふので有る、即ち自然現象には常に同様の事が



行はれ、繰返しが行はれて居るとした。歴史現象にもやはり之に同じ様に同様の事が繰返されて居る。その意味としては歴史の繰返しを認めるので有る。今此の繰返しを意識的に記述した例として Schiller を引用して見る。之はオランダの独立史に書いたもので有る。 "Geschichtes

Alperts des vereinigten Nieder landen von der spanischer Regierung" 此の序文は「世界の歴史は自然の法則の如く同一であり人間の精神の如く単純である。同じ條件に同じ現象を持ち来す」として

この見地に依りて、十六世紀のオランダの人民がイスパニヤの支配より独立した時の事情を約一五〇〇年前、同じその地方に於て Batavi がローマ帝國に反抗した時の事情に比してローマ帝國及びイスパニヤ王國の全盛であつた事、兩國の軍隊が共に優秀精銳であつた事、兩者の總督政治が圧政的であつた事、之等の間に類似を認めて又他の一方には其領土の國民の頑強さ、其技術、市民の指導者であつた Batavi の Cincinnatus の例のオランダ公 William の兩者の人物、其他種々の矢く類似を指摘し

てゐる。この場合の Analogy はオランダの歴史の大家である所の

Motley: "History of the Rise of the Dutch Republic" に於ても夫を承認してゐる。然しその類似が一見承認出来る如きものであ

る。この兩者の行つた比較の當否はこゝには別の問題だ。そして Schiller が歴史現象が自然現象の如く法則的のものとして同條件は同一現象を起すと云ふ根拠有りとして、この事に歴史的事実を比して其の間に著しい類似有りと認めて居る。この場合に歴史には自然現象と同様の事が行はれると云ふ意味で、之を循環と云ふ。此の場合歴史現象が繰返すと云ふ事は一つの方式に出来て居る型を歩いて行く事と有る。此の記述の例の如く歴史現象の中に多くの analogy を見る事の出来ること云ふ多くの比喩的表現である。その場合注意すべき事は、此の循環論を抱く歴史家が等しく教訓的史家の立場に立つて居ると云ふ事と有る。歴史現象は同じ事の繰返しとして其處で今後に處して行くには過去の先例を知つてそれを鑑とする必要有りとする。此の場合に於て繰返すと云ふのは過去が



其儘繰返すと云ふ意味で有る事は明である。何と云へば、前に述べた如くして若し然らば人の意志では変更は出来ない如くに唯高々自分等の運命を知る事以上に知る事は出来ない先例を教訓として将来に處するに云ふ事は、人の意志にて今後の歴史を判断する事となり、夫は即ち自然の繰返しに對して或る変更を加へる事を意味して居る。即ち過去の事柄を全く吟味して是れに模倣を加へて或る事を繰返させるが、或る事は又つて繰返さないといふ意を含んで居る。此の最低の意の繰返しの意味は教訓的歴史とは相容れないのである。然るに實際に於て循環論を主張する人が教訓的歴史の立場に立つて居る。此の呉より見ても多くの歴史家の歴史循環の理論は決して言葉通りに嚴密な意で云はれてゐるのではない。事が判るのである。次に歴史現象の如く循環ではなく矢張り無限の進歩に有る事が認識されて其立場より「繰返す」と云ふ事を考へるに、先に云つた如くに否定されるものであるか否か。

*Bergson*  
此の問題に就いて坪井博士の「歴史は繰返すものか」と云ふ論述の中

にて次の如き事を主張して居る。「文化が全く停頓してゐる場合に於ては歴史は自然現象の如く繰返すと云ひ得るのであるが、事實歴史には進歩が有り、自然現象とは同視出来ない。但し文化の進歩の遲れを時々は歴史は繰返すと云ひ得る場合が有る。こと之に反して文化の発展の急なる時は繰返し論は主張出来ない。即ち部分的に見れば歴史は繰返すの如き事が間々認められる事」が坪井博士の見解なり。即ち大体に於て歴史現象と異り循環で無く繰返しは無い事となる。この循環しない根據としては文化の進歩が有ると看目される。

歴史現象が全く自然現象の如くであり、循環と云ふ事が充分成立すれば、歴史は繰返すと云はれるのである。此の場合繰返すと云ふ事は必ずしも元の事が其儘に起ると云ふ意味ではない。唯自然現象に認められる如き重要な事が本質上重要な事が本質上重要な事が後に来ると云ふ。而して *Bergson* の云ふ如く人間には進歩有り、無限に進歩して行く事は明かである。事が進歩有りといふ事が事実とすれば最早繰返すと云ふ事は無意義



に成り、先に述べた如く多くの歴史家の説いた「歴史は繰返す」との意  
 味は強く循環を主義した *Polycyclic* こそ歴史が正しく、その通りに  
 繰返す 歴史の中に多くの *analogy* を発見し得ると云ふ事  
 にして居るのである。歴史が循環であるはこの *analogy* 成立する。然し  
 進歩が無限に行はれて居ると云ふ事が事実有るとしても尚ほ歴史の中の  
*analogy* は全く失はれて了ふ事にはならないのである。一件 *analogy*  
 とは何か、之は歴史其物が内的に持つて居るものにあらずして我々の観  
 念の中に有るのである。其物の持つて居る非常に多くの性質に捨取模倣  
 を行つて、それを比較して居るので有る。一体二つの事を比較すると云  
 ふ事は我々の觀念の仕事である。二つのものは如何なる場合には異つた  
 ものである。異つたものを比較する事は頭の中で便宜同一レベルに並べ  
 く、そして夫等の中より或る性質を抽象して、そして同じとか、異なつ  
 てゐるとか云ふので有る。歴史に於て *analogy* を行ふと云ふ場合  
 文化が繰返してゐる時には類推は行ひ易い、之は二つの事がその性質の

取捨模倣が問題である。之に反して文化の変遷が甚しくなつた。取捨模倣  
 取捨類推に成り *analogy* を立てる事かむづかしく成る然し立て方に依  
 りては *analogy* そのものに成立し得るのである。歴史の類推に対して  
 又対する議論は進歩の考の外に地域的又は民族的個性論が有る。進歩の  
 側より見ると歴史は段階的に進む。異つた段階に比する事は不可能で有  
 る。これは二つのものを同じレベルと考へることが出来ない筈である。故  
 と思ふ地域的民族的立場より *analogy* を否定する立場も同様の立場を  
 有す。一國民には個性有り、それ故に此の歴史の回轉に特殊のもの有り、  
 故に他の異つた個性をもつ民族とは同視出来ない。要言すれば一方は時  
 間的根拠より否定し、一方は空間的根拠より歴史の 否定す  
 るのである。もとより時代の進みには段階を立てる事が誤りではないら  
 しく、其各段階に於て、各個性を有する事も否定出来ない、又同様に大  
 々の民族が特殊性を有して居る事も事実である、それと云つて其の異つた  
 ものの中に *analogy* が行はれないのは當を得て居ないと思ふ、動物学



者は動物の生活の中より人間の生長類似性を認めて、或種の *analogy* 行ふものである。そして夫等の中には否定出来ないものがある。この場合に動物の生活と人間との間に全く同じ *analogy* に置けない立場が有り乍ら然も其の間の比較が合理的である事が認められるのである。物、其物には固より始めより同一実体は無い異つたものである。其の中より或物を抜いて、それを比較する類似と云ふものもそれ内に在してある固定的先天的性質でない。これを取扱ふ考へ方の中に有る。は歴史事實間の類似は皮相的で、其の相違の方が大である。固よりこの云ひ方は誤りないとしても扱い方に依りては、其の兩者を比較するイ方が妥當である場合もなくはない *analogy* を皮相にするも妥當にするも、それを取扱ふ人の頭の中に有る *analogy* の立て方に有る歴史の研究法の中に歴史的 *analogy* と呼ばれる考へ方がある。之は實際の研究作業に適當する場合が多いものである。此の類推的考へ方は多くの歴史家が採用してゐる所である。この類推的、研究の可能は即ち歴史の中に類推が成立

する事を多くの人が認める証拠である。時代が異なる故必ずしも、其の比較が全的に當を得てないといふので有る。歴史は繰返すとはつまり、歴史の中に多くの *analogy* が存在することの比喩的表現で、この限りに於てこの言には尚ほ意識を有すると云ひ得るのである。唯、前の事か常に其儘に繰返すものでなく此間に進歩有り時代の個性有り。故に類推はやたらに行ふと淺薄のものとなる。或ると云ふ事は疑ひ無く、兎角、この歴史上に類推の成立し得ると云ふ立場より繰返し、つみを限度にて認める事は歴史の智識の実用的意義と結びついて其の立場が有るのである。

ローマの哲學者 *Plinius* が故里に居る母に送る手紙あり、それは首行 *Rome* の状態を報告して居る。其中に次の文句あり、「此等の人間の多衆を見る時に、この非常に大きい町の家屋が決して充分でない様に思はれる。Municipium 又 *Colonia* から、或は全世界から彼等が流入して来て居るのである。」



(註) (1) ローマの市民権のない、ローマに依つて支配される。  
 (2) ローマの市民を移した所で、自治権のあるローマ外で造られた  
 海外植民地である。

或る者又は名譽心が招き寄せて来る。他の者は公職の必要が招き寄せ  
 て来る。又他の者は彼等の信託された使命が引寄せ来る。又他の者は渾い  
 て居る (illuminate、紅燈の巷の事)。アプトクロに取つて都合のよ  
 い放蕩が招き寄せ来る。又他の者を學問の研究が、興業 (芝居) が招き寄  
 せる。二、三の者は反情が招き寄せる。此處に最も多くの chance を見  
 出し得る所の勤勉、この自己の長所を最も發揮、出まらぬ為に集つて来  
 る或る者は其美を賣らん為、或る者は其雄飛を賣らんが為に来る、美德  
 と悪徳とが高き直投を持つて居る所のこの町に集つて来る、人口のあう  
 ゆる種類がある」と。

これは *Bücher* (経済學者) が國民經濟史の中で産業革命後の都市  
 と其以後の都市との相異を説明する為に擧げてある一節である。 *Chance*

の手紙には自由労働に好都合、國外輸出の大量生産の場所としては古代  
 都市は全く其の近代の如き特色を持ってないと論じて居る。之は確に動  
 不可らざる着眼点である。確に *Chance* の手紙の中には産業革命後の都  
 市に集つて居る多数の労働者階級の事を記してない。この時代の工業は  
 農と同じく奴隷の手中にあり、これが古代と近代都市との間に違ひあり、  
 然し *Bücher* は産業革命後の都市の見解と大きい見通しがある、彼は独逸  
 で多くの都市の例を挙げ、この人口構成が直接、間接に工業に依る事の  
 多い事を指摘して居る。下併、彼の産業革命後の世界で非常に辨を抜い  
 て顯著な人口集中の個所について注意を拂つて居ない、それは例へば、  
*England, German, French* 等の國の首府である、此等の諸國は皆  
 近代文化の先端に立つ事で、共通である、その中でも英國、獨逸の如き  
 は最も目覚しい工業國である。然し之等の國で純粹工業地帯の地方で  
 は其の人口の集中仕方は寧ろ多数の小都市を造ると云ふ現象あり、例へ  
 ば人口密度の多いは獨逸の *Rhin* 地方、英國の *Lancashire* の如きあり



る。英国に於いて Glasgow, Manchester, Birmingham は工業所の筆頭  
で人口は London の七分の一か八分の一に過ぎない。

独逸の工業都市も其の首府に比するに其人口は四分の一以下である。  
佛國に至つては首府 Paris が其の郊外 Seine の人口も十百万程である。  
第二の工業地 Marseilles, リヨンの人口は五十万を過す事多くない。こ  
れは我が國の例でも同様である。六大都市の中、商工業地の大段、名古屋、  
神戶、横濱の人口を得へても、小工業都市の東京に及ばず、産業革  
命以後の人口集中の中には云ふまでもなく工業地域に集中する現象あり。  
他面政治文化の中心地にも非常に集中する、この中後者は人類の歴史以  
来餘り見ない現象である。

此の驚く可き集中に付いては商業工業の発達のみでは説明は出来ない。  
其中に古代から大都市に集る人口を構成して居る色々の要素がある。夫  
等が大規模になつて来る。従つて近代首府は産業革命の收穫とも云へる  
が他面古代都市からの後継者たる一面も輕視出来ない。先の Seneca の

手紙を見ても近代の首府都市でも相當にあてはまる文句である。矢張り  
此處に analogy を認めない文には行かない。(1)

(註) (1) 江戸でも古代 Rome でも又何れの地方でも Seneca の云つ  
た事にあてはまる所がある。日本では福岡縣の中に集る人口の  
説明も之に似てゐる。

次に出来事についての analogy について考へて見る。

先づ Napoleon 時代の佛の対独政策は如何んを見るに、独の諸國これに  
中世末以来佛國の永續的敵手であつたのは佛革命が勃発した時に之に妨  
害を加へたオーストリア、プロシヤ(特に独逸の二聯邦)(一七九二年)  
である。更に革命から Napoleon 時代に至る二十何年間或は革命を防がん  
とし、或は Napoleon を妨げんとしたのは英吉利と独聯邦の代表者たる、  
オーストリアであつた。佛國の対独政策は対英政策と共に極めて色々の  
意味で重要である。Napoleon は其處で之に対して如何なる政策を以て聽  
んだか、夫れは例へば一七九七年十月に締結された Campo Formio 條約、



(対オーストリア) 及び一ハ。一年五月の *St. Genevieve* 條約 (対オーストリア) 一ハ。五年十二月の *Reoburg* 條約 (対オーストリア) 一ハ。七年七月の *Tilsit* 同盟 (対プロシヤ)

之等四つの條約に鮮明に *Napoleon* の態度が見える。人之等四つを通して *Napoleon* の取る政策に一貫したものである。即ち次の諸侯である。第一は *Rhein* (川の流域を *Rhein* まで進出させた) 独逸民族から受ける警戒と妨害として *Rhein* 河を利用する。これは既に *Napoleon* の成功の第一である。 *Campo Formio* 條約中の秘密條約が具体化されたのは *Genevieve* 條約である。

第二は、独逸が統一國家になく、大小勢力の割據せる聯邦であるのを利用して其中第一にオーストリア、プロシヤを極力弱め、其反面第一流國家勢力を出来るだけ増加させ一面彼等をして、プロシヤ、オーストリアに對抗させ、又一面彼等をして併國を得として之と結ばせて居る。之が爲に種々の方策を講じて居る事は之等諸條約其他でも判る事です。例へば

其主眼として *Secularisation*, *St. Genevieve* の *St. Genevieve* の *Mediatization*, *Mediatization* と云はれて居る事である。前者は独逸の宗教諸侯の破壊である。既に *Campo Formio* 條約に附した秘密條約で *Rhein* 左岸を併國に譲る。其地方に領土のある諸侯 (ノアルツの選挙侯) 此れは独逸内に其代償地を求む。夫れに相當するのは大僧正の諸地である。此れがやがて実現して来るのであるが *Genevieve* の條約には之が明白となり、其の實行は併諸國が監視する事になる。其處で独逸の中へは *Mainz* の大僧正 *St. Johann* の武士團、独逸武士團、之等の領土を除く一切の宗教諸侯の領土は没収されるとして之等が諸國に分割される。皇帝直宰の都市ハンザの三つの町 *Frankfurt*, *Ungersburg*, *Wurzburg* を除く餘は没収されてしまふ。この様にして宗教諸國や都市が破られ其の代りに従来の第一流國家土地を其へられ位置を高めて居る。夫は例へば *Saxony*, *Bavaria*, *W. Saxe*, *Baden*, *Hessen*, *Reimsstadt* である。この中へ *Bavaria*, *W. Saxe*, *Baden*, *Reimsstadt* 條約に依り王と云ふ事を



許される。又 Saxony は一八〇六年に王と主事になる。この二流国の援助することを *Mediatization* と云ふのである。この意義は独立地位が中央政府より大きな支配の下に服従せしめられる事である。更にオーストリアの領地はしきりに削られ、プロシヤも同様の目に會つた。Napoleon は一八〇六年に Rhein 同盟を組織させてしまふ。此の中に入るものは Napoleon の助けで立つてゐる国である。即ち Bavaria, Württemberg, Baden, Nassau-Saarbrücken 等々主とした十六ヶ國がある。之がつまり *Metallurgieland* の政策のあらはれであった。又之に仿つて、オーストリア、プロシヤを圧迫する手段としてゐる。一七九五年一八〇六年の間プロシヤは中立する。Rhein と Elbe の中間の土地は佛國にさかれば、茲に Elbe 河畔より更に進んで西の方に *Westphalia* (西國) を建てた。東の方にはプロシヤが *Poland* 分割の時の地をさかして *Nassau* を立て、そして Napoleon に好意を持つ *Saxony* 王をして其王を兼ねしめた。かくしてオーストリア持たプロシヤは土地をさかれば、そして中流國

援助の政策の下に幾つかの聯邦を造りプロシヤ外の聯邦で Rhein 同盟と結はしめる。

第三に注目すべき事は独逸を敵とする。政策に關係してロシア方面の熊柔策を取つて居る事がある。之は *Tilsit* 條約で現はれる。プロシヤをして東プロシヤの *Bialy Stok* を東ロシアにさかしの、ロシアはプロシヤと同盟して居るにも拘はらず土地を削られず又對に土地を得て、この秘密條約で英國に對する高に佛國に同盟してプロシヤ、印度の分割さへ計つた。本より之は Napoleon がトルコに於てコンスタンチノブルを初め領土の大半を佛國が取り印度でも英の勢力を捨てさせ若干の勢力をロシアに與へてゐる外大部分佛國が取り、此れが与ロシアの不滿を買ふ。然し独逸を扶んでロシアの歡心をお求めぬれば此れと同盟して又東 *Poland* と同じく *Nassau* の國を取らんとする。これに仍り獨逸の東邊を發達させんと計り、*Tilsit* ではプロシヤ、オーストリアに對して莫大な償金一億四千万と拂はせ、軍備の縮限を實行させた。



以上を Napoleon の対独政策の大要である。之を近時歐洲大戦後の佛國の對独策に比すると若干相違する所あり。先ず *Vincennes* (又後には *Tocanne*) と *Rhein* 左岸の軍備撤廃を命じた。然し少くとも佛國の武力的行爲が *Rhein* の深く妨害する處 *Napoleon* と同じ考である。

(註) (1) 之ハ佛の領土を *Rhein* まづ出してない

*Potsdam* に対する軍備と償金の事には同様なのは *Vincennes* の條約に軍備制限と償金を排はせた事と同様である。 *Napoleon* の中流國援助の政策は統一した佛國に取つては採られたい。然し夫に當る政策として中央歐洲の民族自決の定決である。即ち *Czecho Slovakia*, *Kangury*, *Poland* を独立させ *Yugo Slavia*, *Italy*, *Denmark*, *ルーマニア* 等に地を、かせて居る。之は民族自決の名に於て *Medialilang* の名が含まれて居る *Napoleon* がプロシヤ、オーストリアを削つたと同様に大戦後オーストリアの諸民族を解放させ、オーストリアに人口六七万の國を建て、独逸の土地を削り其上に獨逸オーストリアの合併妨害をする。これ割據的政

策維持の政策である。そして *Napoleon* の時に *Warra* 國が彼に依りて成立した如く現在の *Potsdam* は佛國の力で成立した。此の意味は、獨逸に對しては *Napoleon* の時と同様なものあり。更に對ロシヤ政策を見ると佛國は近時ロシヤとの外交的提議を計つて居る如く見ゆ。佛國が近代最も金融的資本國主義でロシヤとは相入れない。之が外交的にや、もすれば接近すると云ふ事は第一に歐洲大戦前の露佛同盟を導げられる。即ち專制政治の *Gan* の國と歐洲唯一と云はれる共和國との同盟であつた。更に *Napoleon* の對ロシヤ政策にも相通するものあり。

以上を見ると *Napoleon* の對独政策は少くとも其考をよく理解する事に於て現代の佛國の對独政策が明白に判ると思ふ。其を可能ならしむるものは若干其間に *analogy* があるからである。云々までもなく帝國主義盛なる古の時代とは國際關係でも凡て *analogy* 考へる事は不可能である。然し其間に其各部分の手に仍つて *Italy* の *analogy* を考へる事も可能である。



以上の例に仍つて時代や場所を異にした、歴史の間に或程度つ  
*analogy* を立てる事は出来るものと感分示し得る。  
 歴史の繰返すと云ふ意義は初めから或意味に於いてこの *analogy* の或  
 立が可能だと云ふのに外ならない、若し之を其意味に取るなら、尚全く  
 無意味として棄る可きものではない。

〆 歴史の实用的意義

歴史学の实用的意義とは歴史の研究が人間の生活に対して如何なる價  
 値を有するかと云ふ事である、之を特に問題とする所以は歴史の智識の  
 实用的價値が一方に於ては今も尚ほ 〆 傳統的因習的に考へられ史の  
 問題はやゝもするるとその矣に對しての無反省を暴露してゐるのに對して  
 又他の一方にては所謂實用主義の歴史の立場が否定されると共にやゝも  
 すると歴史の研究を以て何等の实用的意義はないと云ふ如く考へられる  
 危険がある、茲にその様な兩者に對して歴史智識の人間生活を伴つて晉

進的なる又正當なる形式の考察が要求されるからである。

歴史は過去の實例を以て人間に教訓を與へるものである。歴史の目的  
 は人を教へる矣に有り、此の考へ方は先述の如くギリシヤ時代の歴史家  
 に多く抱かれた所のものである

之は彼の *Demogorgos Kalkmannanos* と云ふ人の歴史は實例に仍つて教へ  
 る哲學であると云ふ言に表はされて居る、古代の多くの歴史研究記述の  
 原理に有つた、この利害は例へば *Thucydides* にも表はされて居る、彼  
 は其の巻頭に若し目的の歴史が將來の出来事を正しく理解せん爲に過去  
 の出来事の正確なる姿をつかまんと望む人々に取つて有益で有ると云は  
 れ、は自分に満足であると述べて居る、勿論之は歴史が繰返されることの  
 前提であるとの論は有るが、之の立場として過去より教訓を得ようとい  
 ふ、其の様な期待が表はされて居る、そして又 *polybios* さは「歴史  
 の學問より得た智識は實際生活に取つては總ての教育の中最上のもので  
 ある、何れにしても實際の危険に引込まれる事無くして事件の状態の我



的判断を熟させる事は唯歴史のみに於てある」と。此の學問を極めて実践的に西政の多くの教育家が行つた。歴史の实用的意義をこの様に考へる事は其の後の史学史を通じて流れて来て居る。多くの歴史學の中に居てこの見解に出合はすのみで無く更に哲學者、文學者、政治家等が歴史の实用的意義の評價に於てこの立場を認めて居る。それにもまして警句的の表現は無限に多いのである。而して近代の歴史學の発達に歴史研究の目的の中よりしては實用主義の負担を排けたのである。夫れを明言したのは Rankin である。彼は彼の少壯の時代に其の學問的活動の初期にして次の如くに主張して居る。「歴史は今迄出来た利益の爲に Past を判断し Present を教へるに其の任務を負うて来た。自分の書物にこの如き高尚なる任務を行つて来て居ない。それに Past が如何に有つたかを知らせるのみにあつた。」「*Er will also zeigen wie es eigentlich gewesen ist*」つまり其の智識を得る事を目的として居る。此の立場は漸く歴史學の常識と成つて實際的目的の爲に果を研究其物に反はす事が非難され研究の

motto としての實用主義が認められてし *Quelle* は之を次の言に云ひ表はしてゐる。「*Sur Theorie und Geschichte der Historiographie*」歴史が道徳及び實際的原則又は教義であるとは 即ち古代又は Renaissance 以来に於ては永く且つ力強い生命を保つて居た理論も亦減じた。私かすべて之を減じたとは云ふ時、もとより化石を除外して居る。化石は其時もある今でも存在してゐるのである。斯くの如く教訓を我々は歴史の理論として 其のものと成つたと云へる。而して遂に過去の物と成つたと云ふのは歴史理論としての實用主義が 其のものと成つたと云へる事である。歴史智識の实用的意義は夫と別個の立場を有するものである。

「*Bruchstein: Theorie des Historischen Materialismus*」

實際を伴つて有る所の學者、哲學家、理論的法學者は自分自身の如く、専門を、事物の實際的方面を考へない。それは少くとも疑いのないことである。多数の同じ實例が実証される。而して之等の本質は其の裏には存



しない、何となくは観念論者の主観的心理は観念論者の客観的後別に混同す可きではなく、人か何かの仕事に付て考へる事と其の仕事の社会に對して持つてゐるものとは異なるので有る。それは何人も判る如く別個のものである。我々が既に見た如くヒデオロギー、例へば數學は疑も無く實際的要求は起る。それを専門化し、部門に各分化した、或る部門に従事してゐる専門家は自分の學問の實際的要求として論じて彼自身が唯彼の仕事をして居る、而して彼が彼の仕事の爲にする時それは夫は後に生産的に進歩して来る、以前のこの分化の或立しない時は學問の實際的意義は何れでも明らかであるか今日見ればれたのである。歴史學にしても同様である實用主義の否定は所謂研究家の主観的心理の否定である、知識其物か人間生活に關係するか否かは客観的意義或は別個のものである、これは歴史學の中よりも指摘出来る。

Bury: "The ancient Greek Historians" 彼はギリシヤ古代の Thucydides & Polybius の史家に論究して其の實用主義史觀に及ぶ。

この見解は若し其の絶對的な言葉通りの意義に解せらる。夫は單なる nonsense 以上の何れにも非ず、歴史は方法的目的に向つて一時的にたけども対人間知識の總対より孤立せしめられたいものである、そして人間の知識は人間生活に對する關係無くんば何等の價值も有して居ない、而して我々が歴史の爲の歴史と云ふ事を (History for its own sake) 若し degulative maxim として説明するたれば、夫は重要であり且有益である、この意味に於て歴史が丁度それ自身以外に何物にも無關係である如くに研究される必要はならないと云ふ事である、歴史家は過去の事實を調査するに當り少くともその着手する時に事實以外の何物をも考へられなければならないのである、他言を以てすれば "History is a science" である云ふ事を大切とする自然現象の研究にその倫理、宗教、政治に於て社會は密接に關係する歴史現象の研究は夫れと關係しなくてはならない、而して自然科学及び又全く他の部門の如くに歴史も不その科学的發達の爲に自由独立(完全なる)を要求する、若し歴史が政治倫理、神學の礎



(174)

者であることを認めるのである。其の價値は無くなり、且つ其の力は麻痺してしまふ。その機能を充分に論議されるのは他の科學の如くに扱はれ夫れ自身は目的で有るか、の如くなるであらう。これに *History from its own sake* と云ふ叫聲。この *Barnes* の本は十九世紀に於て歴史學がかくまで著しい進歩を成した所のこの叫聲の眞の價値である。之は歴史家の方法及び直接の目的に關係し決して彼等の仕事の終結の目的ではない。

つまり前述の如く専門家の主觀的心理とこの仕事の客觀的價値を別に考へて居る。近代の歴史學の實用主義歴史を否定しても、それは方法的意義を有するのみでこの知識の究極の目的を云ふには非ず。

*Bury* の場合には此れは明らかである。其の他の歴史家に有するものは、*Bury* も實用主義の否定は知識其物に實用的意義を排して居ない事か判る。例へば先に挙げた *Croce* であるが一方に於ては「我々の何人も歴史の學問に満足しない必ず夫等の行動に表はす。だが其の行動の中に自分

の勤又他人の働きを鼓舞する為、歴史の中の彼、此れの中の姿を思ひ起す。更に *Friedrich* は一方に實用主義を否定し乍ら一般に歴史は我々の *part* の現象、状態に現在のそれが如何にして又如何なる事情で彼がに成りしかと云ふ事を明かにして現在と過去との關係を知り一般に歴史は我々に現在の歴史が今右如何に成るかの理解を提出する。此の事は歴史知識の價値を述べて居る。これには勿論、實用主義の考へた如く先例より教訓と取る立場は認められ居下り而して *past and present* には其の法を明にして將來の同轉・理解に供すことを云ふ事に一つの實用主義を認める。かく嚴密に歴史の實用的意義を完全に否定する事は出来なない。歴史の知識の如何なる姿に人間生活に交渉を保つか、そして意義を有するか。

(175)

歴史の知識が我々に取つて如何なる實用的意義を持つかと云へば、丈は一口に云へば一般に人間社会について又實際的には我々の生活してあ



ある現在の社会に付くより深く認識を持たせる事である。歴史の知識が現在の社会に対してより深き認識を持たせる根拠は第一に社会はまつたく歴史的成生に外ならぬ事である、各個人が一切の記憶を失つた時は非常なる困惑に陥入る事は勿論である、之は社会生活に付ても云へる事である。現在社会は云はゞ一つの木の切口断面である、其の断面を形成するには永い過去がある、過去の多くの断面の連続が現在の断面に在る、過去の變遷を知らずして現在の断面を適當に理解出来ぬ、過去の變遷を知る事が深ければ深いだけ現在の断面をよく知るのである、現在社会の時間的若しくは空間的特殊性は歴史を持つてゐるものである、歴史の知識（研究）は其歴史性を理解させるのである、従つて極めて單純な抽象的理論を以て未來の現象を、事に対しては歴史の知識が多くの反省を提供する、此の様に過去を知つて現在を理解する立場は多くの歴史の實用性を否定してゐる、前述の如く先例から得る教訓の立場を否定する人々でも異議はない、例へば先の *Bury* の如きは先例から教訓を得る、ギリシ

ヤ以来の事例を否定してゐるが然し歴史知識の價値を第一、第二の英に置いてゐる、又 *Robison* の "New History" の中で同じく先例の教訓に仍るのを認めないが然し矢張り此の立場を認めて過去が行為の先例を要する為でなく我々の行為が過去に關する充分の知識の上に築かれた現在の状態の充分の理解に立脚する故に歴史の知識が根立つのであると云ふて居る、こう云ふ風な歴史性を無視した色々の實際的やり方が屢々誤りに陥入つた事は歴史上で見える事である、現存する事物に於て一見、それは存在理由 (*raison d'être*) の不明である事に於て深く吟味すれば其處に正當存在理由のある歴史的根拠の存在する事が判る事がある (1)

(1) 例をあげると、昔のほつたらかした荒地あり、之を開墾し又耕したまたま此處に浸水あり之を防禦する提防から他の方にも害を及ぼしたとする時はこの例である、同じ山林あり之を次第に切り開いて耕地にする、此れが防風林に彼立つたのであつて、其為象象的に害を受けた時人類學者が之を局部に説明する、之は歴史的



研究の不完全の爲である。

此の奥では異議の入れぬ餘地はない。此處に多く述べる必要はない。但し、この立場に連関して、改選を要する事あり、夫は歴史が寧ろ盲目的に不必要に歴史的存在に執着するの結果を生ずる事である。換言すれば歴史に捕へられる事である。事物の歴史性因習性に捕はれる事は別個と見る可きである。之に際関するものは歴史の相対性である。それは社会、物的事物が歴史的存在である。そして夫は所謂歴史の相対性である。歴史の相対性とは大々の事物の単独存在でなく全体と相連関して全体の一部分として存在する事である。或る事柄は一つの時代で、其歴史の相対性から當然の存在であるので、今日から見れば一つの言論ある社会思想、或る制度と云ふか如きものも極めて不合理と見える場合あり、例へば中欧、政、政のローマ教会及び教会の主義する。の如きは夫れである。然し夫れも中世の社会事情を見れば其處に相対的合理性あり、歴史の認識は時間的に現はれる推移廻転である。歴史其物は廻転である。一つの

過程から他の過程への変遷之が歴史の主題目である。これまでの歴史の相対性が歴史の研究で明にされる。神聖な歴史は時代の変遷及び相対性的關係の推移で存在の理由を失墜し唯單に過去の遺物として化石的存在の時代錯誤を理解させる眞の歴史には人を奴隷とするものはない。歴史の知識が合理的社会進歩の見方である。事物の來歴を正しく糾明する相対性の理解は決して盲目的に其存在を執着させなくするからである。即ち時としては却って其 analogy を指摘して夫れを否定する態度を生む事になる。由來實用主義の歴史は否定され特に先例から教訓を得る立場が攻撃を受けて更に又実用的意義を認めて先例が教訓を得る立場を全く認めない。歴史の知識がや、もすると保守的思想を生む事になり、先例に捕はれて進歩の不理解に陥入る事を避けんとする事より出てる過去の先例と云ふ事が保守的態度を取る不可避的な結果を生むと考へられるからである。乍ら過去の盲目的執着の決して神聖な歴史知識の、はてなく保守的態度の過去の知識の必然的結果でもない。歴史に仍り現在の正しい



理解は決して現在の事物の無批判的尊重にはならず、眞の歴史知識の必然的結果は常に実践的態度を反省すべし之を強制するに役立つ、茲に歴史智識の正當が實際的意義を有する訳である。(1)

(註) (1) 十八世紀独逸の或る宮殿の不用な所に兵隊が立つ、これに其教を尋ねると上官の命なりと云ふ、上官に尋ねると、上官は傳統なりと云ふ、この傳統は最初の女帝のカタリナがフレデリック大王の時臨時に夫の必要で之を立てた、夫が済んでから不用の命を出すのを忘れた、其處で一時的命令を永久的と見た、ある事物の存在理由がなくなつた時は之を省く可しと云ふ事は歴史に於て説明される、其他の制度に於ても同様である、時代の推移がありて不用制度を改革する事は過去の研究から理解されると幾分保守的になる、之は歴史的研究者にとつて難るべからざる事の如く見えるが研究の結果として之は出て来るものである、頑迷的理想的意見は地盤を理解する事に仍つて其の如くなるものである、之れ

又歴史の学び方とも云へる、過去の夫々の事に付て歴史の根拠を持つと云ふ事を一方に於て理解する可きで歴史性に難れる事と盲目的に過去に依存する事とは正しい實際的意義である

歴史の實際的意義は上に述べた如くは何人も肯定する所だと思ふ、併し下ら多くの人々に仍つて否定される所過去の先例は時代が遠く先例として役立つたない、と云ふこの議論は果して全く疑を入れる餘地のない眞理かどうか、もとより時代が遠つてゐる時は、殊に文化形體の著しく変化した時は、歴史的相対性より考へても過去の事例が今の時には先例とならぬ事は明らかである、併し下ら我々の個人生活に於て我々の過去の経験が何等役立つ事は到底云へない、其場合最密に云へば現在と過去の場合は其の環境が全く相同じてない適當に取捨撰択して過去の経験は何等かの指導的意義を持つ、この個人の場合の事は同様に又社会の關係でも當てはまると云ふを得、唯個人の場合より社会の歴史は永く複雑である、其の種々の事情關係が多く異なつてゐる、其の事が存在すると



は認めざる可きである。

個人の場合と社会の場合とは全然別個だと云へない。例へば現在の世界では列國対立を認めらる。然も其対立關係は先鋭的である。此は殊に帝國主義的時代に於て顕著になつて来た所の理由であつて其處に歴史の相對性も認めらる。乍併今日の列國對立狀態を理解する上に於て例へば近世の歐洲諸國間に行はれた國際的對立關係間の諸現象、之を比較して其處に全然別個の物と見る事の出来な一面がある。たゞに夫の母ではない。古代ギリシヤ都市國家時代で荒地の間に無數の國家が存在し對立してゐた。其等國々の間に起つた對立關係に於る諸現象にも或共通なものも認めらる。更に支那の古代戰國時代に諸國對立して其の時の狀態にも何かしらの共通を認める。又我が國戰國時代に諸侯の割據對立の時の狀態にも相通する所あり。之は種々の處で指摘出来る。(遠文近攻、合縱連衡)<sup>(1)</sup>

(註) 例、古代ギリシヤに於て、ペルシヤとギリシヤの關係に於ても

アテネに敵對する態度を取つてゐる。又信長の中國に於て包圍戰を行ふ。この時にも遠文近攻策を取る。

更に又戰爭の時に美名を用ゐる行為あり。夫は毛利元就が季時賢を滅して師の仇を討つ。この場合は元就の利己的立場を否定出来ない。秀吉の山崎の合戰、小牧山の合戰も其例である。獨國が英國に迫つた時、英國に對して國際間の中立を破つたと怒る。伊國に如何にも近代文化の敵だと云つたが、佛國が獨國に入ったとしたら果然として之を見たらう。前の時は獨國は佛國に倒れ、ベルギーが合併する。此れ英の利害關係による行為と見られる。更に今日のエチオピア問題でも同様の事が云へる。

之等總ては要するに利害關係から——美名(自由、文化、人類の爲)から起つたものである。だから各時代でなす行為は凡て利害美名の下に行はれ、殊に例外として桃太郎の鬼ヶ島征伐をのみ等けられると思ふ。



こう考へて現在の国際関係を理解する時全然過去の先例を度外視する事は出来ない、固より時代文化も違ふ従つて其終に先例とする事の出来な  
 い事が多くある、併し下ら其等の過去をよく理解する事は少くとも現在の  
 の国際関係がより深く、より一層廣く理解する事に役立つのは否定出来  
 ない。つまり先に述べた歴史には時代錯誤が立てられる、夫は時代が異  
 なると淺薄な表面的 *analogy* を考へる弊に陥入り易い事は事實で之は適  
 當な *analogy* を否定出来ないと言ふ事に聯関する。

研究方法で類推的推意が許されるれば又張り同じく過去の中からしては類  
 推的立場では現在に理解出来ない、餘りに歴史に捕はれる弊害を排撃す  
 る為、且つ文化進歩廻轉を力説せん為に歴史の中に先例として見る事を  
 全然否定するのは餘りに極端である、此の矣ぐも又張り、適當なる用意  
 の下に過去の知識が役立つと云へると思ふ、若し現在社会を時間的に深  
 く理解する立場を歴史の知識の内容的意義と名付ければ先例を先例とし  
 て見る側も形又意義と名付ける、之を認めらる事が合理的だと思ふので

ある。

前の例(内容)から云へば現在の接近した時代が重くなり特に近世史  
 の價值が其実に主脚する、然し後の意義から云へば之は必ずしも、今日  
 接近した近世史だけから古代史の直接文化に關係のない團が役立つと云ふ  
 事になる、文化考証のない新 *analogy* を立てる時に其の事柄の一層  
 必然性が認められる訳である。



昭和十二年一月 日発行

編輯発行責任者

東京市本郷区本郷六の九

金 森 豊

印刷所

東京プリント刊行会

印刷部

発行所 東京プリント刊行會

東京市本郷区本郷六丁目  
帝大赤門前



342  
1122



(V 0.40)

終